

平成27年度第2回射水市総合教育会議議事録

1 日 時 平成27年11月12日

開会 午前10時00分

閉会 午前12時00分

2 場 所 小杉庁舎303会議室

3 出席者

【構成員】

夏野射水市長、長井教育長、織田教育委員、宮原教育委員、眞岸教育委員、大代教育委員

【事務局説明員】

寺岡市長政策室長、倉敷市長政策室次長、一松政策推進課長、尾山教育次長、成田教育次長
原学校教育課長、荒谷生涯学習・スポーツ課長

4 傍聴人数 4名

5 協議等の概要

開 会

夏野市長挨拶

国を挙げて地方創生の取組が進められており、本市においても、射水市版総合戦略を10月末に策定したところである。

総合戦略では、結婚や出産といった人生の節目で、射水市に戻っていただけるような、また、そういう対象世代に移転を考えていただける環境づくりに取り組むこととしている。

とりわけ、学びの環境の充実とあわせて、ふるさと教育を実施することによって、郷土愛、ふるさとへの誇りを育みながら、市外・県外にいても、地元射水市のことを念頭においていただくことや、人生の節目に戻ってきていただく、あるいは、市の活性化・発展にご尽力をいただくことを思い描いている。

協議事項

(1) ふるさと教育の推進について(事務局説明<資料1、2、3>)

[教育委員]

射水市に住んでいる全ての人が、射水を愛し、富山を愛する環境づくりが必要であると考える。

大門中学校の生徒が校外学習で「富山の誇りを伝えよう」というテーマのもと、県下10か所以

上において体験等学習をされていた。とても良い取組であると感じたところであり、こうした学校の特色を生かしたふるさと学習を後押ししていく必要があると考える。

また、新湊博物館の職員が敬老会の場で地域の神社、仏閣、まつりについて解説しながら、このまちがつくりあげられたいわれを話された。先人の知恵と歴史のある営みによってつくられた我がまちを誇りに持ち、孫や県外に出て行かれた子供、友人に話してあげてくださいとのことであった。

このことは、ふるさととのかたちを通して、福祉部門と教育委員会との横のつながりをもってできたことである。今後は、行政部局の横の連携がますます必要になってくるとともに、様々な事業をコーディネートできる民間の力も必要となってくる。そこから市全体に広がりを持たせることができる。

[教育委員]

県内高校生に対する意識調査では、将来富山に住みたいと答えた者が約6割、また富山の魅力については空気や水がきれい、自然環境に恵まれているが上位であったように、ふるさと教育が根付いてきているものと考えられる。

ふるさとは、先天的に積み上げられた歴史によって形つくり、後天的には、五感を使って感じ取った残像が思い出になるものと思う。

今、学校教育で行われている郷土の先人、歴史、地域、文化を学ぶことは、自分たちの生き立ちを支えた自然・ひと・ものへの価値を再認識することであり、郷土への理解、愛着、誇りを持つことに繋がり、一番大事にしていきたいところであると考えられる。

自然体験や社会体験を通して、五感をフルに生かす、本物に出会う、人に関わる等の経験を多くさせることがとても大切だと思われる。射水市には、豊かな自然、文化、地域資源が多くあり、これらを生かしながら、社会全体で子供と大人が学びあう環境を整えていくことが必要である。

このような環境の中で射水市は、面白いとか、ひとの温かさ等をしっかり感じとることによって、それが残像となって、ふるさと回帰につながることを期待する。

[市長]

地域とのつながりが、ふるさとを気にかける要素、ポイントになると思う。

[教育委員]

今の子供は、自然体験が少なすぎると思う。子供のころからの自然体験が、ふるさと回帰に繋がり、また、人間をつくる。自然体験が多いと、道徳観とか正義感が強いというデータがあると聞く。自然とふれあうことが大切であり、学校にも、ピオトープや米、野菜作りなど自然とふれあう機会を増やしていくことが大事だと思われる。

[教育長]

環境教育の行き着くところは、命の教育であると思っている。あまり目を向けられない水草や雑魚が生きている環境が、人間が一番住みやすい良い環境である。こうした環境を大事していくことが、そのまま命を大事していくことになる。命の動き等を見て感動したり、心をふるわせる感情体験の場面が環境教育の中に多くある。子供の豊かな感情体験を保障していくうえで、自然体験が重

要であり、そうしたふれあえる場所を各世代が一緒に作っていくことも大事であるとする。

[市長]

子供が自然とふれあえる機会がだんだんと減ってきている。いろいろな人と関わること、五感を使ってふれあい、感じる事が大切である。

[教育委員]

五感の中でも特に嗅覚が大切であると聞いたことがある。実際にそこに行って、自然のにおいや、お祭りの熱気を感じる事が大切である。体験させるには、地域の人の力がすごく大事となる。いろいろな事業を実施していくうえで、参加する側の立場に立ってまとめるコーディネートの存在が必要であるとする。

[教育委員]

地域における各分野の専門家の話を聞かす機会を与えてやることもよいと思う。これがまた、ふるさとの愛着、誇りにつながる。

[教育委員]

各部局が連携して事業を進めるほか、プロジェクトチームをつくって、事業を実施していくことは可能なのか。

[市長]

可能である。これまでも、大きな事業や課題があるとき、また、その方向性を決めていくときにプロジェクトチームを作っている。

[教育長]

ふるさとの愛着、誇りを土台にして、社会的な人口減少を抑制していこうという政策的な思いも理解できるが、ふるさとの愛着と誇りは、それだけではなく、たくましい人材を育成するという面もある。

ふるさとの愛着と誇りを体験的にもっている子供は、困難に打ち勝つたくましさの原体験になる気がする。ふるさとの出会いや実感は、そのまま、人との出会いや実感である。そこには必ず人とのふれあいがあり、人との感情の共有や、ふるさと愛着・誇りが育まれるとすれば、つらいことがあってもふんばれる、原体験としても重要な意味を持っているとする。

人口増、地域活性化を考えたときに、いきいきとしている人と、いかに出会わせるか、また、どう引き出すかということが重要であり、それが施策のもつ働きである。

どういった施策がよいのかを考えたときに、教育委員会の枠組み中では、納まらないことが多い。このため機動的に対応していくようなプロジェクトチームであったり、コーディネートの役であったり、施策をマネジメントしていく体制が重要になってくると思っている。

[市長]

ふるさと教育が、地方創生の取組としても大きな意義があると確認できた。

自然体験や地域の人とのつながりが重要であり、地域との連携を深めていく必要がある。また、取組を進めていくうえで、部局横断的に、それぞれが連携を取れるような体制が必要である。

例えば、農林水産物の生産は、これに取り組むことで、結果的には環境の保全につながる。また、子供たちの体験が加われば、ふるさと教育にもつながる。

教育委員の思いを市長部局に伝え、ふるさと教育にしっかりと取り組んでいきたい。

(2) 平成27年度全国学力・学習状況調査の結果と今後の対応について(事務局説明<資料4>)

[市長]

今後どのような対応が必要か、こういった視点が重要かを共通認識としていきたい。

[教育長]

家では、学校と違い、自分をセルフコントロールする必要がある。ゲームやスマホ、インターネットを一人でやる時間が伸びていることが心配であり、改善できるようにPTAの皆さんと力を合わせて取り組んでいく必要がある。

[教育委員]

ゲーム依存症になっているのではないかとと思われる子供が増えている。

[教育長]

人間関係であれば、思い通りにいかないときにどうすればよいかを考えるような大事な体験をすることができるが、ゲームはリセットすれば済む。

[教育委員]

家庭教育アドバイザーをしており、子育て井戸端会議の中で母親から、忙しくて子供に十分に関わってあげられないとの相談を受けることがある。ある一定の年齢までは、親子の関係が密にとれるような子育て環境をつくっていくことが重要である。

[教育長]

就学前と就学後では、アドバイザーの人が代わり、担当課も代わってしまう。小学校を卒業するまでは、一貫して若いお母さんを支える体制をつくることが重要である。

[教育委員]

授乳をしながらスマホをしたり、検診の待ち時間に子供にスマホさせたりしている母親がおり、それが普段の使い方となっているような気がする。

普段の生活の中で、体全体の五感を使った、遊びをさせたり、本物の体験をさせれば、ゲームの抑制につながると考える。

[教育委員]

手遊びを一緒にしたり、童謡を歌ったりすることも重要なことである。知っている子と知らない子が両極端であり、放課後こども教室の役割というものも重要となる。

よい循環をつくっていくことが、子供たちの学力に対する意欲にもつながる。家族の中で、よいサイクルをつくれるように働きかけていくことが大事となる。

[教育委員]

家庭だけでなく、学校と地域と家庭の連携が必要である。学力がついていないので頑張らせるのか、学力以前に環境が整ってないのか、学校の集団をしっかりと見定めていく必要がある。

学校診断尺度のデータも活用しながら、学校の教育方針を、家庭や地域と共有し、連携していくことが必要である。

[市長]

学校の主体的な取組について言われるが、学校と家庭、地域と連携して環境づくりを行っていくことが重要である。

中学生3年生の家庭学習の時間が、国や県平均より短い、どう捉えればいいのか。

[事務局]

どれだけ塾に行っているのかにも関係する。都市部は、塾に通う割合が高い。また、調査を行っている時期は4月であり、射水は、運動部・文化部が盛んで、6、7月の大会に向けて、一番部活動に力を入れる時期である。引退した7月の調査であれば、差はかなり縮まる。逆に、最後頑張れるのが射水市の子供たちである。そういった意味で、3年生を対象にした土曜塾や夏休みの補習授業といった施策は有効であり、活用できる。

[市長]

土曜塾や夏休みの補充学習は、非常にいい意味での反響がある。しっかり続けていきたい。

3年生になって間もない調査であるので、2年生の子供たちに向けて、何かアクションを起こしていく必要があると思っている。

[教育長]

学習時間の短い子供たちの自尊心が低かったり、無気力であったりすることが多いとしたら、もっと一人ひとりに応じたきめ細かな指導が、今後さらに必要になってくる。3年生からに急ではなく、1、2年生の時から、授業と家庭での学習との連携や、部活動も含めてきめ細かい指導を行う必要がある。